救いは信仰によって　　ローマ 3:21-26

古代のローマ帝国は、ヨーロッパの中心でした。その文化、法律、制度は今も残っています。身近なものでは、I と V と X を組み合わせた「ローマ数字」は時計などで使われています。「ローマ」が入ったことわざもいくつかあります。「ローマは一日にして成らず」「郷に入っては郷に従え」とは英語ではローマに入りてはローマに従え」「すべての道はローマに通じる」などです。

聖書にも「ローマ人への手紙」があります。そこには、ローマに至る街道が舗装され、整えられていたように、救いの道が論理的に整った形で書かれています。それは先ほどの言い方を用いて「救いに至るローマ（書）の道」と呼ばれ、これにはローマ 3:23、6:23、5:8、10:9-10、10:13 の五つの箇所が選ばれています。きょうはその最初の、ローマ 3:23 を学びます。

ローマ 3:23 は、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」と言って、私たちに罪からの救いが必要であることを教えています。しかし、いきなり、「罪」とか「神からの栄誉」と言われても、聖書を知らない人にはなんのことか分からないでしょう。聖書の言う罪について、ローマ 1:20 には「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」とあります。ここには、神が創造者であり、神はご自分が造られた世界を通して、ご自身を示しておられ、私たちは神を否定することができないと書かれています。美しい自然を見た時に圧倒されて言葉も出なかったということがなかったでしょうか？私たちに神を正しく伝えてくれるものは、なによりも聖書ですが、神が造られたこの世界もまた、神がどんなに偉大なお方であるかを示し、神が決して木や石に刻み、どこかに収めておけるようなお方ではないことを教えています。詩篇に「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた」（詩篇 19:1-4）とある通りです。

日本では昔から高い山があると、それを神として拝んできました。山に登るとふもと、頂上、その途中とかに大抵、神社の鳥居や社があります。しかし、創造者である神を知る人々は、山を見上げる時、その山を造られた神を思い見て、神に信頼を寄せました。詩篇 121:1-2 では、こう歌われています。「私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。」すべての物を造り、あらゆる物を治める神だからこそ、私たちを守り、助け、救うことが出来るのです。私たちを救うお方は、じつに「天地を造られた」創造者である神なのです。

人々はかつてはさまざまな物を神々として拝み、そこから「神話」が生まれました。今では、「神話」をそのまま信じる人はいなくなりましたが、かわりに「科学」をそのまま信じるようになりました。「科学的にはこうだ」と言われると、それが本当かどうかを確かめずに鵜呑みにしてしまうのです。「科学信仰」「科学崇拝」が人々に創造者である神を見失わせています。そのひとつが進化論です。進化論では海から最初に単純な生命体が生まれ、そこからより複雑な生命体へと変化し、最終的に人間が生まれたと言います。今日の世界は、偶然と偶然とが重なって出来たものだというのが進化論です。進化論では宇宙は 138 億年前に始まり、20 万年前に人類が生まれたと言います。何億年という長い時間があれば、無生物から生物が生まれ、単純な細胞から知性も意志も感情も持った人間が出来ても不思議ではないというのです。しかし、進化論は仮説にすぎず、数多くの矛盾があります。ところが、人々は、あたかも進化論が証明された事実であるかのように信じ、創造者である神を締め出しています。人間の一つ前はサルや

チンパンジーとされますがペットとして見るならば可愛いと思いますが、近いからと言って自分の親戚のように思えるでしょうか？　私は思えません。

私たちは自分の中から神を締め出したなら、自分が生きている意味を見失います。進化論によると、私たちは偶然の産物で、偶然ここにいるだけで、人生には何の意味も、価値も、目的もないと主張されます。創造者である神を自分が信じなくなると人々の自由や平等が失われます。つまり恐れるべき神が否定されると自らが神のようになり力のある者が力のない者を思いのままにしてもよいことになってしまいます。創造者である神を知らないこと、また、神を信じないことは、自分を不幸にするだけでなく、社会をも惨めなところにしてしまうのです。

神は、その全知全能のお力によってこの世界を創造されましたが、同時に、人間を神とコミュニケーションができる特別な存在としてくださいました。私たちはロボットのように作られていません。自然界に法則を定めてくださった神は、神と人との間にも信仰と道徳の法則を定め、人がそれに従うとき、最も幸せになれるようにしてくださいました。ところが人は、まことの神を捨て、神ならぬものを神として礼拝するようになりました。ローマ 1:21-23 に、こう書かれています。「というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」人々はさまざまな形の偶像を作りました。人間が神を作り出すことによって、神の上に立とうとしました。神と人間との関係が逆さまになってしまったのです。神と人との関係が無いなら、人と人との関係も逆さまになり、壊れていくのは当然です。

ローマ 1:21 に「神を神としてあがめず、感謝もしない」とありましたが、ここに人間の罪があります。聖書は、直接神に向かう罪を教え、また、どんな罪も、それを「罪」と定めた神に対する罪となると教えています。まことの神を知らなかった時、良心が痛むようなことをしてしまったとき、「どこかで神が見ておられる」と感じたことはないでしょうか。そういう思いになるのは神がすべての人に神を求める思いを与え、神の戒めをその良心に書き込んでおられるからなのです。たとえ聖書の言葉を知らなかったとしても、人はその良心に刻まれた戒めによって、神に対する自分の罪を知らされていたのです。

すべての罪には罰が伴います。交通違反をすれば罰金を払わなければなりませんし、重い罪であれば実際に刑務所に行かなければなりません。同じように、神に対する罪にも刑罰が伴います。聖書ではそれは「さばき」と呼ばれています。私たちは誰でも、神が正しい「さばき」を行われることを知っており、また、それを期待しています。もし、私に損害を与えた者が何の罰も受けなかったら、きっと納得できないでしょう。それを人間が裁けないのなら、神に正しいさばきをして欲しいと願うでしょう。私たちは神に正義を求め、さばきを願うのです。ところが、自分のこととなると、さばき行う神は嫌だと言うのです。確かに誰も「さばき」などといった厳しい言葉は聞きたくありません。しかし、聖書は私たちを脅すために「さばき」を語っているのではありません。私たちをそこから救うために「さばき」について語り、神が人をさばくだけの神ではなく、愛と、いつくしみと、忍耐と寛容の神であり、私たちを悔い改めに導びこうとしておられることを教えているのです。

実際、神は、ご自分のさばきを曲げることなく、私たちの罪を赦す道を作ってくださいました。私たちに向けられるさばきが、誰か他の人に向けられ、代わりに私たちが罪の赦しを受けるという方法です。そして、その「誰か他の人」が、神の御子イエス・キリストです。罪のないお方が、私たちが受けなければ

ならない「さばき」を受けてくださり、私たちはそれによって赦されました。そして神は、自分の罪を認めた者を「義と認めて」くださると定めてくださいました。何の罪も犯したことのない者とみなすだけでなく、神の栄誉、つまり、神の子どもとしての身分、神の愛、永遠の命を与え、永遠の神の国を受け継ぐ資格をも与えてくださったのです。

もし、聖書がローマ 3:23 で終わっていたら希望はありません。しかし、続く 24 節があります。23 節と 24 節はもともと一つの文章です。「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」イエス・キリストの救いの範囲は「すべての人」、その内容は「神の恵み」、救いの方法はイエス・キリストの贖い、つまり、十字架と復活です。救いの手段は「価なしに」、つまり、信仰によってイエス・キリストが成し遂げてくださった救いを受け取ることによって罪赦され、救われます。具体的には、どのようにするのか？26 節に「イエスを信じる者を義とお認めになるため」とあるように、イエス・キリストを救い主として受け入れることによってです。それ以上でもそれ以下でもありません。

人が神を否定しようとするのはなぜでしょうか。昔の良心が責められ、神のさばきを恐れるからです。歴史の中で神がいなければ、罪もなく、さばきもなくなると考え、神を締め出そうとしてきたのです。しかし、そこにはたましいの平安も満足もありません。私たちは神のない教育を受け、神のない生活をし、神のない社会を作り、神なしに世を去っていくだけの人生を送るだけで終わってしまいます。救いへのただひとつの道は神を認め、自分の罪を認め、イエス・キリストを救い主として受け入れることです。そのとき、さばきは取り除かれ、私たちは義と認められ、たましいは神の平安で満たされます。これが、聖書の教える「救いの道」です。まだクリスチャンで無い方はぜひ今日、その一歩を踏み出していただきたいと思います。すでにその一歩を踏み出した者は、この救いの道を歩み続け、この救いの道に人々を招こうではありませんか。